

## 《トラヤヌス帝記念柱》と《マルクス帝記念柱》浮彫にみられる「馬」の表現

中西 麻澄 (東京藝術大学)

古代ローマ社会では馬は動力や移動手段であり、日常身近にいて、戦争にも使用された。そしてモニュメントや美術作品の中にも多数あらわされているが、馬を主とした研究は僅かである。このことから馬の表現の考察には多くの新知見が見込まれる。本発表は、《トラヤヌス帝記念柱》(113年奉獻)と《マルクス帝記念柱》(193年以降)における浮彫の馬の表現から、浮彫画を見直す試みである。

まず考察のために「ナンバリング」手法を用いた。これは既に《パルテノン神殿》浮彫研究でも用いられている。両柱浮彫に表現された馬に一頭ずつナンバーを付しながら、馬のポーズ、馬具、騎乗者をも含め観察・考察し、あわせて発表者の乗馬体験からの判断も加えた。その結果、両柱で464頭の馬を、ローマ軍馬、敵の馬、同盟軍馬、戦利品の馬、使役馬に、1頭ずつを見分けることができた。《トラヤヌス帝記念柱》浮彫では163頭(ローマ軍馬100頭、同盟軍馬18頭、敵の馬20頭、ラバ25頭)を、《マルクス帝記念柱》には301頭(ローマ軍馬206頭、敵の馬73頭、ラバ22頭)を確認できた。さらには「ナンバリング」したことで、二つの場面での新たな場面同定を提示することが可能となった。一つは《トラヤヌス帝記念柱》の「落馬」場面である。落馬人物はこれまで敵の使者とされてきたが、彼の乗っていたラバの考察から、味方の職人と同定できた。もう一つは「ドナウ川を渡る」場面である。川の中の人馬は敵のダキア人とみなされてきたが、溺れる馬の考察から、同盟軍であることを明らかにした。

次に「馬の身振り言語」に注目した。《トラヤヌス帝記念柱》では四つの歩様(停止、並足、速足、襲歩)、《マルクス帝記念柱》では三つの歩様(停止、並足、襲歩)の形のパターンが用いられていることがわかった。また馬、騎乗人物、馬を連れた人物の様子から、その馬や周囲の状況を読み解き、戦利品として獲得した馬を見分け、同盟軍騎兵独特の騎乗術や馬具、また464頭の中から、皇帝の馬を見分け指摘することができた。

最後に、両柱浮彫の馬の表現を比較考察した。これにより、《トラヤヌス帝記念柱》に比べ、《マルクス帝記念柱》には二つの表現上の特徴があることがわかった。第一は「単純化」である。マージナルな、牧歌的テーマを差し挟むことなくテーマを単純化し、歩様も四種類から三種類に限定するなどの単純化をしていた。第二は、同モチーフ、同主題の中につけられた「ヴァリエーション」である。なかでも12回もある「落馬」では、一頭ごとに全て、落ち方のポーズに変化をつけていたことが挙げられる。

このような馬に特化した考察においても、両柱は、2世紀初頭の古典主義的様式と、終わり頃の表現主義的傾向を示し、これはローマ彫刻の全体的な方向性とも一致するものであった。